

日本リハビリテーション医学会 専門医制度卒後研修カリキュラム

〔序文〕

日本リハビリテーション医学会は1963年に設立され、リハビリテーション医療ならびに医学の発展と会員の臨床知識・技能の向上に寄与してきた。1980年に専門医制度が制定され、1987年から5年間の移行期間を経て1992年に認定臨床医制度と新たな専門医制度が発足した。さらに2003年に専門医制度規則が改正され、「専門医」の名称が「リハビリテーション科専門医」に変更された（学会誌40巻474頁掲載）。

一方、教育研修体制も専門医認定制度と平行して整備され、1982年にリハビリテーション医学卒後研修ガイドライン（学会誌19巻352頁掲載）が作成され、1993年に改訂された（学会誌30巻370頁掲載）。その後2003年に教育大綱が定められ（学会誌40巻473頁掲載）、それに則った卒後研修カリキュラムの改訂案作成作業が教育委員会により認定委員会との連携をとりつつ進められてきた。

この研修カリキュラムは、教育委員会で作成したもので、その内容として、リハビリテーション科専門医に相応しい知識・技能を修得することを目指し、卒後5年間のリハビリテーション医学の研修を行う際の目標として望まれる項目とレベルが示されている。しかし、臨床場面では、この研修目標に示されたこと以外にもリハビリテーション科専門医として必要とされることは多く、日進月歩のレベルを保持するためにも、リハビリテーション科専門医資格取得後も本研修目標をこえてさらに生涯研修に努めることが望まれる。

〔カリキュラム修了の要件〕

1. 2年間の卒業臨床研修
2. 上記1の終了後、更に学会の認定した研修施設での3年間以上の研修

〔研修の到達レベルと評価基準〕

総論と各論の各項目について到達すべきレベルと年次を示す。
 評価は、到達すべき年次ごとに指導責任者及び研修者自らが行う。
 到達レベル及び評価基準の指標は以下のとおりである。

到達レベル

I. 知識

- A：よく理解している
- B：概略を理解している

II. 診断・評価

- A：自分ひとりでできる
- B：指導責任者のもとでできる
- C：概略を知っている

III. 治療

- A：自分ひとりでできる
- B：指導責任者のもとでできる
- C：概略を知っている

評価基準

- 3：目標に達した
- 2：ほぼ目標に達した
- 1：さらに努力を要する

(総論)

	研修期間目標				研修期間	自己評価	指導責任者評価	
							評価	施設番号
0.初期臨床研修	1-2年							
(1)内科学(神経内科,呼吸循環器内科,老年内科を含む)	6か月							
(2)外科学(整形外科,救急医療を含む)	6か月							
(3)小児科学(障害児療育を含む)	1か月以上							
(4)精神医学(障害児療育を含む)	1か月以上							
(5)地域医療(リハビリテーション医療を含む)	1か月以上							
1.リハビリテーション医学総論	到達年次				到達レベル	自己評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
I. 知識								
(1)リハビリテーション医学概論	○				A			
(2)機能解剖・生理学								
a. 筋骨格系(骨,関節,靭帯,骨格筋)	○				A			
b. 神経系(中枢神経系・末梢神経系・自律神経系,感覚器)	○				A			
c. 呼吸・循環器系	○				A			
d. 摂食嚥下	○				A			

	到達年次				到達 レベル	自己 評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
⑥異所性骨化に対する処方		○			A			
異所性骨化の薬物療法ができる								
⑦その他			○	○	A			
IV. マネージメント・法制度								
a. チームアプローチ								
①チーム医療の管理		○			A			
リハビリチームの構成とスタッフの役割を理解し、医師の役割を果たせる								
b. 地域連携		○			B			
地域における社会資源を把握している								
地域のスタッフと交流できる								
c. 医療制度の概略を理解している		○			B			
V. 医療倫理・医療安全								
a. 医療倫理								
医療倫理に関する講習会・研修会に参加している		○			A			
医療倫理に沿った診療を実施している		○			A			
インフォームド・コンセントに基づいた診療を実践できる		○			A			
b. 医療安全								
医療安全に関する講習会・研修会に参加している		○			A			
リスクマネジメントについて理解している		○			A			

	到達年次				到達 レベル	自己 評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
痙攣発作	○	○			A			
b. 特徴的な障害と合併症の管理ができる								
摂食・嚥下障害		○			A			
排泄障害		○			A			
痙縮		○			A			
c. 理学療法の処方ができる		○			A			
d. 作業療法の処方ができる		○			A			
e. 言語療法の処方ができる		○			A			
f. 補装具の処方ができる		○			A			
g. 神経心理学的アプローチができる								
機能障害に対するアプローチ			○		A			
外的補助手段・包括的アプローチ			○		A			
h. 就学・就業支援ができる				○	C			
(3) 脊髄損傷								
I. 知識								
a. 脊髄損傷の分類を理解している								
外傷性脊髄損傷	○	○			A			
その他の脊髄損傷	○	○			A			
b. 脊髄損傷の病態を理解している								
損傷レベルと機能予後	○	○			A			
損傷部位と病型	○	○			A			
c. 脊髄損傷の合併症を理解している	○	○			A			
II. 診断・評価								
a. 損傷レベルと病型を診断できる	○	○			A			
b. 評価尺度を用いて機能障害を評価できる								
ASIA		○			A			
Zancolli分類		○			A			
Frankel分類		○			A			
c. 排尿障害を評価できる		○	○		A			
d. 呼吸障害を評価できる	○				A			
III. 治療								
a. 原疾患と併存症に対応できる		○			A			
b. 特徴的な障害と合併症を管理できる								
自律神経過反射		○			A			
異所性骨化		○			A			
排泄障害		○	○		A			
褥瘡		○			A			
疼痛		○			A			
痙縮		○			A			
呼吸障害		○			A			
c. 理学療法の処方ができる		○			A			
d. 作業療法の処方ができる		○			A			
e. 補装具の処方ができる		○			A			

	到達年次				到達 レベル	自己 評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
症状を評価できる	○	○			A			
X線学的所見を評価できる	○	○			A			
薬物療法が行える		○	○	○	A			
関節内注射が行える		○	○	○	A			
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			
②腰痛・脊椎疾患								
症状を評価できる	○	○			A			
X線学的所見を評価できる	○	○			A			
薬物療法が行える		○	○	○	A			
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			
③変形性股関節症								
症状を評価できる	○	○			A			
X線学的所見を評価できる	○	○			A			
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			
④変形性膝関節症								
症状を評価できる	○	○			A			
X線学的所見を評価できる	○	○			A			
関節穿刺，関節内注射が行える		○	○	○	A			
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			
⑤骨折・骨粗鬆症								
代表的な骨折(大腿骨頸部骨折・脊椎圧迫骨折など)を理解している	○	○			A			
症状を評価できる	○	○			A			
X線学的所見を評価できる		○	○	○	A			
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			
(7)脳性麻痺								
I. 知識								
脳性麻痺の定義を理解している	○	○			A			
病型分類を理解している	○	○			A			
成人脳性麻痺の問題点(二次障害)を理解している		○	○	○	A			

	到達年次				到達 レベル	自己 評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
II. 診断・評価								
発達を評価できる		○	○	○	A			
原始反射が評価できる		○	○	○	A			
評価尺度を用いて中枢性運動障害を評価できる		○	○	○	A			
III. 治療								
a. 原疾患と併存症に対応できる		○	○	○	A			
b. 特徴的な障害と合併症の管理ができる								
痙攣		○	○	○	A			
痙縮		○	○	○	A			
呼吸障害		○	○	○	A			
c. 理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
d. 作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
e. 補装具の処方ができる		○	○	○	A			
f. 手術療法の適応が判断できる		○	○	○	A			
g. 就学支援ができる		○	○	○	A			
(8) 神経筋疾患								
①パーキンソン病								
I. 知識								
パーキンソン病の症状を理解している	○	○			A			
薬物療法を理解している		○	○	○	A			
II. 診断・評価								
評価尺度を用いて中枢性運動障害を評価できる		○			A			
障害度を評価できる(Hoehn & Yahr重症度分類)		○			A			
III. 治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
言語療法の処方ができる		○	○	○	A			
②脊髄小脳変性症								
I. 知識								
病型分類を理解している	○	○			A			
II. 診断・評価								
診断基準にそって診断できる	○	○			A			
評価尺度を用いて中枢性運動障害の評価ができる		○			A			
III. 治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
言語療法の処方ができる		○	○	○	A			
③多発性硬化症								
I. 知識								
疾患の概要を理解している	○	○			A			
薬物療法を理解している	○	○			B			

	到達年次				到達 レベル	自己 評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
II. 診断・評価								
評価尺度を用いて中枢性運動障害の評価ができる		○			A			
III. 治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			
④筋萎縮性側索硬化症								
I. 知識								
疾患の概要を理解している	○	○			A			
人工呼吸器の適応を理解している	○	○			A			
II. 診断・評価								
症状を評価できる	○	○			A			
筋電図による診断ができる			○		A			
呼吸障害を評価できる	○	○			A			
摂食・嚥下障害を評価できる		○			A			
III. 治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
言語療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
人工呼吸器の管理ができる		○	○	○	B			
心理的サポートができる		○	○	○	A			
⑤多発性神経炎								
I. 知識								
疾患の概要を理解している	○	○			A			
薬物療法を理解している	○	○			A			
II. 診断・評価								
症状を評価できる	○	○			A			
筋電図による診断ができる			○		A			
III. 治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
⑥ポストポリオ症候群								
I. 知識								
疾患の概要を理解している		○			A			
II. 診断・評価								
症状を評価できる		○			A			
筋電図による診断ができる			○		A			
III. 治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	A			
作業療法の処方ができる		○	○	○	A			
補装具の処方ができる		○	○	○	A			
生活指導ができる		○	○	○	A			

	到達年次				到達 レベル	自己 評価	指導責任者評価	
	1-2年	3年	4年	5年			評価	施設番号
疾患の概要を理解している	○	○			A			
Ⅱ．診断・評価								
機能障害を評価できる		○	○	○	B			
異所性骨化を診断できる		○	○	○	B			
Ⅲ．治療								
理学療法の処方ができる		○	○	○	B			
作業療法の処方ができる		○	○	○	B			
補装具の処方ができる		○	○	○	B			

リハビリテーション科専門医 研修手帳
第2版 第1刷 2010年4月より引用